

^ 13  
3104  
1





13  
3104  
1-5

13  
3104  
1

席上奇觀垣根草卷首

近頃故篋乃中に垣根草と題せり

多のがらを獲てみまを披覽す

其文鄙俚に諸家の草紙の

可なり於體にわが假名にまゝい

ま江乃ららあく觀んまらば

少も其載ふやを皆古者

遺事幽冥人物靈異の誌識

昭和九年  
七月二十五日  
購求



席<sup>セキ</sup>立<sup>タテ</sup>乃<sup>ノ</sup>奇<sup>キ</sup>觀<sup>カン</sup>と<sup>シ</sup>子<sup>コ</sup>會<sup>カイ</sup>一<sup>イツ</sup>作<sup>サク</sup>者<sup>シヤ</sup>乃<sup>ノ</sup>  
 姓<sup>セイ</sup>名<sup>メイ</sup>と<sup>シ</sup>志<sup>シ</sup>々<sup>々</sup>以<sup>モ</sup>恐<sup>コソ</sup>々<sup>々</sup>不<sup>フ</sup>奇<sup>キ</sup>と<sup>シ</sup>乃<sup>ノ</sup>心<sup>シン</sup>  
 閑<sup>カン</sup>人<sup>ジン</sup>の<sup>ノ</sup>後<sup>ノチ</sup>と<sup>シ</sup>久<sup>ク</sup>茶<sup>チャ</sup>話<sup>ワ</sup>代<sup>ダイ</sup>の<sup>ノ</sup>  
 乃<sup>ノ</sup>ト<sup>ト</sup>々<sup>々</sup>々<sup>々</sup>と<sup>シ</sup>心<sup>シン</sup>人<sup>ジン</sup>遲<sup>チ</sup>日<sup>ニチ</sup>長<sup>チヤウ</sup>夜<sup>ヤ</sup>乃<sup>ノ</sup>  
 徒<sup>タ</sup>然<sup>ゼン</sup>と<sup>シ</sup>消<sup>シユ</sup>々<sup>々</sup>不<sup>フ</sup>友<sup>ユウ</sup>と<sup>シ</sup>可<sup>カ</sup>は<sup>ハ</sup>作<sup>サク</sup>者<sup>シヤ</sup>乃<sup>ノ</sup>  
 平<sup>ヘイ</sup>意<sup>イ</sup>々<sup>々</sup>々<sup>々</sup>洛<sup>ラク</sup>西<sup>セイ</sup>隱<sup>イン</sup>士<sup>シ</sup>某<sup>ケル</sup>誌<sup>シ</sup>以<sup>モ</sup>  
 此<sup>コノ</sup>草<sup>ソウ</sup>紙<sup>シ</sup>雖<sup>モ</sup>非<sup>ヒ</sup>下<sup>カ</sup>世<sup>セ</sup>教<sup>キョウ</sup>補<sup>ボ</sup>史<sup>シ</sup>傳<sup>デン</sup>之<sup>ノ</sup>書<sup>シヨ</sup>  
 續<sup>ツグ</sup>之<sup>ノ</sup>供<sup>ケ</sup>一<sup>イツ</sup>時<sup>ジ</sup>之<sup>ノ</sup>奇<sup>キ</sup>觀<sup>カン</sup>則<sup>スレバ</sup>可<sup>カ</sup>謂<sup>イハ</sup>作<sup>サク</sup>  
 者<sup>シヤ</sup>之<sup>ノ</sup>本<sup>ホン</sup>意<sup>イ</sup>也<sup>ナリ</sup>仍<sup>シテ</sup>授<sup>ツク</sup>剞<sup>ツ</sup>劂<sup>ツ</sup>云<sup>ク</sup>爾<sup>ニ</sup>  
 明<sup>メイ</sup>和<sup>ワ</sup>七<sup>シチ</sup>年<sup>ネン</sup>寅<sup>イン</sup>正<sup>テイ</sup>月<sup>ゲツ</sup>管<sup>カン</sup>翁<sup>ウ</sup>某<sup>ケル</sup>誌<sup>シ</sup>

者之本意也仍授剞劂云爾  
 明和七年寅正月管翁某誌

因<sup>ユ</sup>之<sup>ノ</sup>志<sup>シ</sup>々<sup>々</sup>此<sup>コノ</sup>書<sup>シヨ</sup>原<sup>ゲン</sup>本<sup>ホン</sup>一<sup>イツ</sup>帙<sup>シツ</sup>十<sup>ジュウ</sup>卷<sup>クワン</sup>  
 傳<sup>デン</sup>々<sup>々</sup>と<sup>シ</sup>今<sup>イマ</sup>之<sup>ノ</sup>前<sup>マヘ</sup>伊<sup>イ</sup>と<sup>シ</sup>持<sup>テ</sup>々<sup>々</sup>  
 々<sup>々</sup>々<sup>々</sup>後<sup>ノチ</sup>篇<sup>ヘン</sup>五<sup>ゴ</sup>卷<sup>クワン</sup>々<sup>々</sup>古<sup>コ</sup>今<sup>イマ</sup>  
 武<sup>ブ</sup>將<sup>シヤウ</sup>外<sup>ガイ</sup>傳<sup>デン</sup>と<sup>シ</sup>題<sup>タイ</sup>々<sup>々</sup>凡<sup>ソト</sup>古<sup>コ</sup>今<sup>イマ</sup>  
 武<sup>ブ</sup>將<sup>シヤウ</sup>の<sup>ノ</sup>事<sup>ジ</sup>蹟<sup>セキ</sup>紀<sup>キ</sup>傳<sup>デン</sup>々<sup>々</sup>々<sup>々</sup>



乃ふとあゆみたるはくはく系  
逸史とていふ事あり梓行  
他日とまじりの事あり

細くもなす事あり  
なす事あり

服部入道一徳月日物部集

物部入道一徳月日物部集

席上奇観垣根草物惣目録

一の巻

深草の翁相字の御地奴と知る事

伊友弟乃中重衛の娘と冥婚の事

極能正連荒田の祠と壇事

二の巻

在原業平文海に託し寛と新の事

寛明義仲と禱し石山に隠る事

三の巻

鞍晴宗文婦再生の縁と結ぶ事

宇野志郎陸守の怪に逢ふ事



四の巻

小櫻奇縁にゆく貴子と壽年

山村が子孫五世同族忍の字と守る事

夏屋織後之妙達子道と守る事

五の巻

松村兵庫古井の娘後と守る事

千載の班狐一條を圖と試む事

環人見と去後と激々家と真の事

以上十之條

一の巻

席上奇觀垣根草一之巻

深草の翁相字の御地奴と知事

え弘の頂山城深草の里士一人の徳あり常に於て市中所と

免ぐらうて相字の御とらうて一錢と乞其日の糧乃まば又御を

かどことばんその御文字の点画とらうて吉吉禍福とやんねも

差こそあり其の人名とあるは深草の公羽とのことばありえ

弘建武の乱に畿内最争乱の境と成四民その土とやんねる事

あ公羽もいづらと乱と避たりえちつとと曆應の喧まら都

もすく静あんとは翁又於て出ますとわのこく一人御其

御の妙ありとあらえ相とともしる者多し上皇其名を同多し

朝の字とやんね面とく公羽相と免え公羽権とらうて云



官人の書一ふいぬ朝の字つらむと十月十日の字ありて  
日月とたなる一文字ありて此月日は降誕一文字ありて  
あてぬ人ありては月日はあてぬとてはあてぬとては  
位とり居るをまゝあてては北面地なりて地を以て音院  
の字所をみれば字を相りては其外何候の人と書居る  
一字とあて相りしは其字の論ありて是を以て音院  
なり上白字を當りては時後一領も目を貴文を賜ふ  
唯一字五に後とゆゑ其外とありて上白字とて其意欲ありて  
是より朝野は其名なく都下とてはたけり一日細川家の館  
諸人名集りて是にほゑる館の秘ありては人ありて  
くまひとて相りては先館の主頼之春の字とては公卿云

春の字折とて人の日ありて右後身人の隠しとあり威推各  
日の字とてはあてぬとては君とては此字とては久の字  
に威推君の流れたる但もは諸者のためは覆りては日月  
の蝕とては速るの事とてはあてぬとてはあてぬとては  
塩治判官の定も在りては人の字とては相りてはあてぬ  
一語を信子加へては威令とてはあてぬとてはあてぬ  
まて一語をよ加へてはあてぬとてはあてぬとてはあてぬ  
よりとてはあてぬとてはあてぬとてはあてぬとてはあてぬ  
あてぬとてはあてぬとてはあてぬとてはあてぬとてはあてぬ  
びす果へ頼之の新波白鳥とてはあてぬとてはあてぬとてはあてぬ  
もわらふ西園國の地とてはあてぬとてはあてぬとてはあてぬ



一画 疑責せらるる後子又高職に後一龍遇ひりたり極治を  
 其妻よりまず出せ遂に執事師也たりたす斃さきりるが詞也  
 なることあり後子執事高師也直義と不平に確執するは  
 案の字を以て吉法とてなる一見一眉を鑿穿して其の禍平且と出  
 だるに折入四の字とありて其後よりまただるとも  
 かくそつと一府の人執事の怒をば身え叫んさるる門前より  
 枯骨死はむとて人何のさるることわんと独言して去ぬ果ては  
 八日とて漢族滅の禍とてより人々其の神のごとくありて  
 以松浦に居る近といふ所の在京たりしが國あり恥あらん  
 子方し奉りけりも松浦に族のさるるを之方と國たり友近在  
 系のりといふども將軍家の疑ひかりて數多の忠告もさばり

善は抑もそ妻妊娠へ已ま二月の節も及ぶも方秋の氣さき  
 友近を捉へ妻とて也の字をかき久相を求むる也の字を  
 より助語ありて是必居同助の事なりとある也の字より午あり下  
 一画 海を以ててりる盛多き午ありて友近なるの詞たりたり  
 あり後子の詳ありてとてさるる君親屬土地に離れりたり  
 池より水より馳り馬あり君必進退は宗師なり一説や人を活け他と  
 ありまじ地あり今人としてとてさるる君親屬土地に離れりたり  
 とも也の字語の末ありてとてさるる君親屬土地に離れりたり  
 ことわりとてりる友近なるの事なりとてさるる君親屬土地に離れりたり  
 の遅速とありてとてりる友近なるの事なりとてさるる君親屬土地に離れりたり  
 一画のまじりてりる友近なるの事なりとてさるる君親屬土地に離れりたり







御草と論んる家の名をかくしむるは是より也の字法を加  
 て地と今賢室のなまふりく地獄あり速く其故を拂いたまはる安  
 穩ありまじしとや友近人なるは是を降くの術をさふ羽ふみ柳蔭術  
 わり試し用ひまじし門前に出やぐらなまかり懐中を懐りて一封の書紙  
 出東流水に之朝も眼なまらざるわ平と伝さるる行てま  
 こまこと用りま家のごとくと思とさへ腹中雷鳴痛楚しく小地敷千と  
 ぐら敷貝の後跡平に氣力後て平日はむらむらとく將軍家の不意  
 んまえんくはえ前功の當りわくる友近謝儀とさこまむたぬるま  
 とはらひる後跡とさこまむらむらとく遂にその終るところとまら世の人との術  
 とさこまむらむらとくその術のむらむらとく一井と不井とくはまらむ  
 ばまらむらむらとくまらむらむらとく彼とむらむらとく者かむらむらとく

伊豆若力仲ね後之姫と冥婚の事

伊豆の頃定海の名は伊豆作宗とくまのあり先祖より東氏の後ありが  
 来永の後世を定海は逃くは後のももむ月日となるとまらむらむら  
 それが末に伊豆若力則良とくまのあり生れ流がふかざぬと後よまらむら  
 男あり或時不用のまありはむらむらとくまのあり強山の林林を通りまらむら  
 こまむらむらとくまのありむらむらとくまのありむらむらとくまのあり  
 やぐらむらむらとくまのありむらむらとくまのありむらむらとくまのあり  
 よこのむらむらとくまのありむらむらとくまのありむらむらとくまのあり  
 わらむらむらとくまのありむらむらとくまのありむらむらとくまのあり  
 まらむらむらとくまのありむらむらとくまのありむらむらとくまのあり  
 んむらむらとくまのありむらむらとくまのありむらむらとくまのあり  
 んむらむらとくまのありむらむらとくまのありむらむらとくまのあり



乃のほしきとよみしきいんせいの内はあかまきいんせいの  
 としきいんせいの人の徳家とてあはれにけしきあはれに  
 ほく尾花とて花を落ちりやちの紅雲とて花をさかすはるはるの徳  
 一とてとてわきとて軒をさかすはるはるの徳  
 かのうとていんせいの其のあはれにけしきあはれに  
 乃のほしきとよみしきいんせいの内はあかまきいんせいの  
 としきいんせいの人の徳家とてあはれにけしきあはれに  
 ほく尾花とて花を落ちりやちの紅雲とて花をさかすはるはるの徳  
 一とてとてわきとて軒をさかすはるはるの徳  
 かのうとていんせいの其のあはれにけしきあはれに  
 乃のほしきとよみしきいんせいの内はあかまきいんせいの  
 としきいんせいの人の徳家とてあはれにけしきあはれに  
 ほく尾花とて花を落ちりやちの紅雲とて花をさかすはるはるの徳  
 一とてとてわきとて軒をさかすはるはるの徳  
 かのうとていんせいの其のあはれにけしきあはれに

乃のほしきとよみしきいんせいの内はあかまきいんせいの  
 としきいんせいの人の徳家とてあはれにけしきあはれに  
 ほく尾花とて花を落ちりやちの紅雲とて花をさかすはるはるの徳  
 一とてとてわきとて軒をさかすはるはるの徳  
 かのうとていんせいの其のあはれにけしきあはれに  
 乃のほしきとよみしきいんせいの内はあかまきいんせいの  
 としきいんせいの人の徳家とてあはれにけしきあはれに  
 ほく尾花とて花を落ちりやちの紅雲とて花をさかすはるはるの徳  
 一とてとてわきとて軒をさかすはるはるの徳  
 かのうとていんせいの其のあはれにけしきあはれに  
 乃のほしきとよみしきいんせいの内はあかまきいんせいの  
 としきいんせいの人の徳家とてあはれにけしきあはれに  
 ほく尾花とて花を落ちりやちの紅雲とて花をさかすはるはるの徳  
 一とてとてわきとて軒をさかすはるはるの徳  
 かのうとていんせいの其のあはれにけしきあはれに



くらぶりの花を懐いてよるさびのさすめがらにわかれすうから  
らへまきとまの夜あがりやがし月影の風情を帯か月をら  
ぬくまげ月の美人の河原の磯女をばとくらぬくま老女が懐  
しりあしきりまのあかすも身りまひ花の下級ゆふふをば  
まきとまのさすめをけりけり懐く身のをせと涙をわきまきと  
酒者を出しかりし婚儀を懐く帯かもまきとまのさすめがら  
くらぶりの花を懐いてよるさびのさすめがらにわかれすうから  
ぬくまげ月の美人の河原の磯女をばとくらぬくま老女が懐  
しりあしきりまのあかすも身りまひ花の下級ゆふふをば  
まきとまのさすめをけりけり懐く身のをせと涙をわきまきと  
酒者を出しかりし婚儀を懐く帯かもまきとまのさすめがら  
くらぶりの花を懐いてよるさびのさすめがらにわかれすうから  
ぬくまげ月の美人の河原の磯女をばとくらぬくま老女が懐  
しりあしきりまのあかすも身りまひ花の下級ゆふふをば  
まきとまのさすめをけりけり懐く身のをせと涙をわきまきと  
酒者を出しかりし婚儀を懐く帯かもまきとまのさすめがら

かあまがおどろけささるまきとまのさすめがらにわかれすうから  
くらぶりの花を懐いてよるさびのさすめがらにわかれすうから  
ぬくまげ月の美人の河原の磯女をばとくらぬくま老女が懐  
しりあしきりまのあかすも身りまひ花の下級ゆふふをば  
まきとまのさすめをけりけり懐く身のをせと涙をわきまきと  
酒者を出しかりし婚儀を懐く帯かもまきとまのさすめがら  
くらぶりの花を懐いてよるさびのさすめがらにわかれすうから  
ぬくまげ月の美人の河原の磯女をばとくらぬくま老女が懐  
しりあしきりまのあかすも身りまひ花の下級ゆふふをば  
まきとまのさすめをけりけり懐く身のをせと涙をわきまきと  
酒者を出しかりし婚儀を懐く帯かもまきとまのさすめがら  
くらぶりの花を懐いてよるさびのさすめがらにわかれすうから  
ぬくまげ月の美人の河原の磯女をばとくらぬくま老女が懐  
しりあしきりまのあかすも身りまひ花の下級ゆふふをば  
まきとまのさすめをけりけり懐く身のをせと涙をわきまきと  
酒者を出しかりし婚儀を懐く帯かもまきとまのさすめがら











侍後世多行むりてはりしはりし世故ものもまゝなる  
ふかきいよく大原のしほもつらもまゝんとてはりし世もまゝなり  
一はふは世の人にもいへりてはりし世もまゝなり見よまははりし世も  
いたるもまゝなりし世も一落し多し世の東にまゝなりし世も  
移りし世もまゝなりし世も一落し多し世の東にまゝなりし世も  
本のまゝなりし世の世も出でてはりし世もまゝなりし世の東にまゝなりし世も  
とふ名復りし世もまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世も  
やぞをまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世も  
と頼なき世もまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世も  
世のまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世も  
石のまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世も

とまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世も  
いたるもまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世も  
しとまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世も  
まゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世も  
わまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世も  
のまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世も  
にまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世も  
まゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世も  
只松柏をまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世も  
なる五輪をまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世も  
まゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世の東にまゝなりし世も



わづらひかたき縁がとまらざる事、大原へあつて二に人の  
姓をいふ事、いふに「張」といふ姓の名もあつた。その  
まじはる酒のいふに「張」といふ姓の名もあつた。その  
まじはる酒のいふに「張」といふ姓の名もあつた。その  
まじはる酒のいふに「張」といふ姓の名もあつた。その  
まじはる酒のいふに「張」といふ姓の名もあつた。その  
まじはる酒のいふに「張」といふ姓の名もあつた。その  
まじはる酒のいふに「張」といふ姓の名もあつた。その  
まじはる酒のいふに「張」といふ姓の名もあつた。その  
まじはる酒のいふに「張」といふ姓の名もあつた。その

あかたしえ緒のやうに、いふに「張」といふ姓の名もあつた。その  
まじはる酒のいふに「張」といふ姓の名もあつた。その  
まじはる酒のいふに「張」といふ姓の名もあつた。その  
まじはる酒のいふに「張」といふ姓の名もあつた。その  
まじはる酒のいふに「張」といふ姓の名もあつた。その  
まじはる酒のいふに「張」といふ姓の名もあつた。その  
まじはる酒のいふに「張」といふ姓の名もあつた。その  
まじはる酒のいふに「張」といふ姓の名もあつた。その  
まじはる酒のいふに「張」といふ姓の名もあつた。その  
まじはる酒のいふに「張」といふ姓の名もあつた。その

鹽飽正連荒田の祠と壇



やうく累代一城のまかりし氏豊より入家門其勢い倍り  
 しんぬりてこのころに隣國に奪りし時をゆるぎ應仁の亂に細川は  
 属して致功ありんらん將軍の家は侍て在京したりん大明の  
 細川と送りし山邊より入りて東へは伊予諸國別當の舊を以て  
 投宿しし舊を語ると淀川とより下河内神吉の二村を以て  
 汲し後おありけりもなまなりありて便船とをふ氏豊より舟とを  
 し其姓名を問ふと西國方のたゞく荒田行末と名ふ武術無名と  
 語らば其の辨法をぞやとふと氏豊は益ありと信く酒肴を奉  
 しく舟を空に舟名をいふと時近く居りて云ふ承の誠の語  
 富田のまきしし其の小村あり荒田の邊と云ふは宮守御門に傳

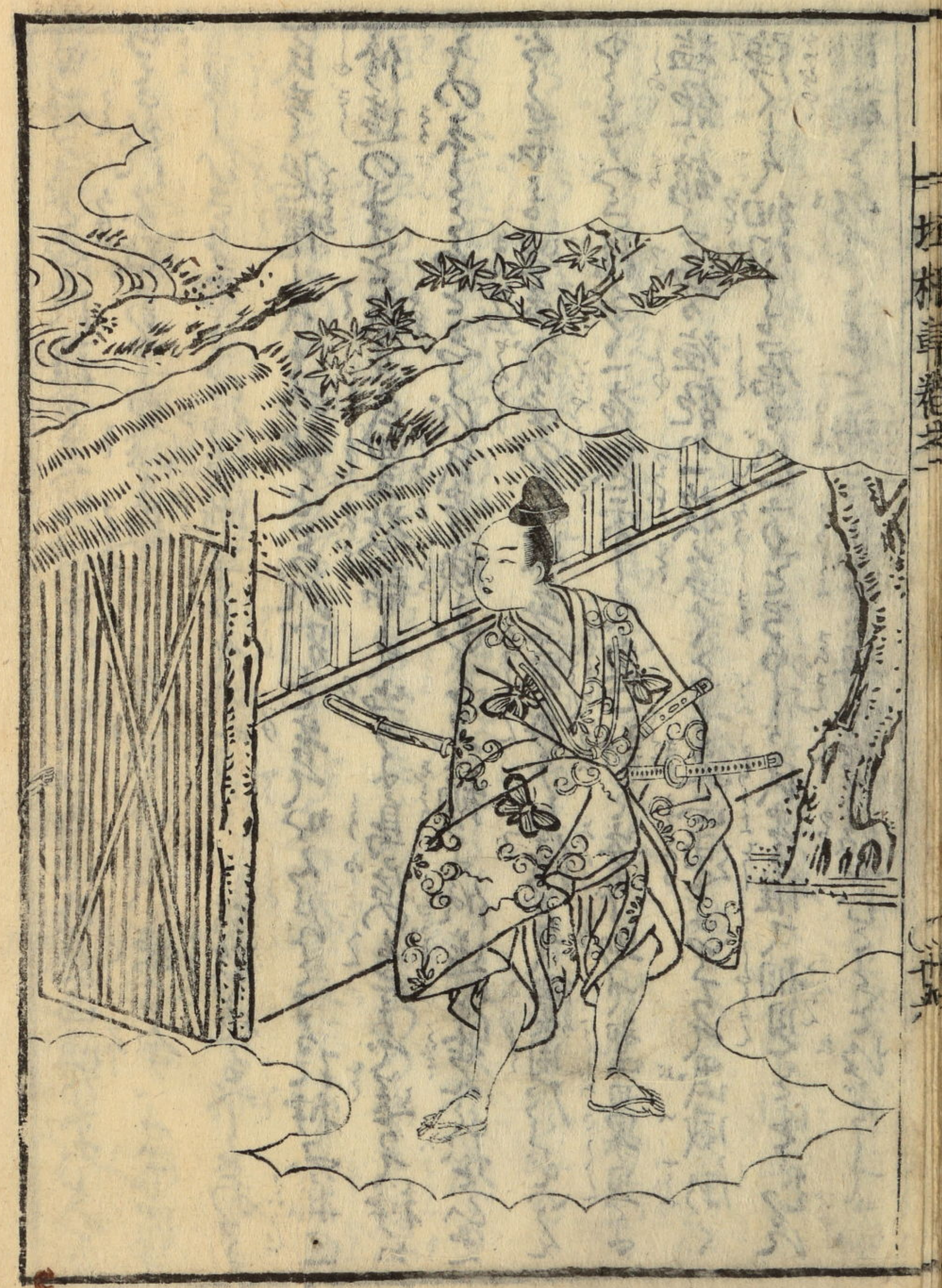
わりしと近き其の無華に誰一人此邊の者あり其上土比車海より  
 て魚散免と居てけりふすらんは石明といはれ地を下り多ぶらば  
 の祠廟とありし舊觀より後せんことを承又君の福佑と援助と  
 今侍りしとあり訪多しと云ふも神人路隔たすは僕後と  
 ありて君一人ありたりと云畢て忽其形をばん氏豊奇  
 怪とて恨むもわれ一城のまきもあやと未頼もはばん君ち  
 し其まきもされ其まきのま細川より海をわたりて瀬川を下りて  
 軍將をも助けしとあり侍りし氏豊神乃詞をばん合をえし領  
 事して彼地にちりし幸ふ富田の城守りかまきと云氏豊と云  
 ちりし氏豊と云ふは神の詞のまはらるる服し荒田のまきあり  
 ちりしは城南二里外にちりし林あり荒田のまきと云神祠あり



荒廢して後、子放むらとをなす。子別案内と聞か。か。と。と。多小誠。人家と離る。一里餘にた。水沿右の園。う。を。病。さ。く。後。身。入。昼。く。く。蘆葺生茂。路。と。く。氏。を。行。乃。幼。の。と。僕。後。と。き。ま。け。馬。と。あ。り。く。只。一。人。路。も。あ。ま。と。分。行。り。る。左。移。り。路。は。接。た。と。れ。を。頼。わ。ま。も。ま。ま。子。さ。あ。り。た。と。く。も。ん。荒。田。明。神。の。字。あ。り。ま。の。社。頭。さ。ま。と。後。奥。す。た。ら。行。は。一。陣。の。風。起。く。土。沙。と。捲。起。人。と。あ。り。暫。わ。り。く。在。意。く。く。と。ま。あ。り。別。名。多。う。と。り。神。あり。氏。豊。比。に。休。く。祐。助。は。く。人。眉。目。と。同。さ。ら。う。と。謝。と。神。又。幼。と。ま。を。と。称。く。と。く。く。と。む。と。二。所。餘。り。く。社。院。に。て。る。拜。殿。の。基。礎。の。ま。あ。り。を。是。林。も。軒。ら。り。破。き。く。荒。廢。多。く。と。も。由。傍。の。林。の。中。に。人。乃。

明。多。く。と。る。に。誰。と。ま。は。神。云。當。國。入。江。郷。に。塩。籠。三。連。と。云。と。の。あ。り。ま。家。に。不。教。あり。也。此。子。較。も。く。一。身。餘。り。小。末。子。命。と。ま。と。羅。責。し。む。ま。も。七。宿。債。漸。畢。つ。え。五。日。の。う。り。去。放。還。と。ま。の。ま。氏。を。恐。懼。く。と。の。他。と。ら。ん。別。と。ま。を。か。ん。ん。に。神。又。再。と。修。造。の。ま。と。託。を。氏。豊。教。諾。く。出。り。身。居。の。ま。を。送。り。神。の。ま。の。ま。と。ま。を。氏。を。城。か。ん。り。類。子。修。造。と。ま。を。か。ん。ん。に。ま。を。連。多。教。の。ま。の。入。近。多。荒。多。う。ら。修。造。を。費。用。し。て。い。ん。や。も。ま。を。修。造。の。ま。の。一。夜。思。索。く。忽。一。計。と。ま。を。出。り。聖。日。早。回。り。塩。籠。の。籠。の。ま。の。塩。籠。の。一。族。多。く。と。ま。を。連。子。の。ま。を。武。威。の。ま。を。強。く。し。細。川。も。属。と。ん。一。方。と。ま。を。氏。を。推。て。相。見。と。ま。を。此。外。病。と。ま。を。謝。守。氏。を。再。之。強。を。後。や。む。と。ま。を。修。造。と。ま。を。





花柳章卷之二

十五



床にありて對面と云連云云多岐木疾し漆就中時痛楚  
 堪く身は困倦し余旦夕に世を去る君何の議すべしありて駕と担  
 ぶる中と訪に氏を傷りく云貴所の病との據と云と  
 後脚二言と進んたや子も多岐木多岐木人す多岐木鬼神  
 と驅役する術粗多岐木と云頃日城南荒田の森すむ多岐木彼神  
 貴所の不敬と怒りく控括して呵責を加ふ所の痛楚と云  
 多岐木此人多岐木新く祠廟と云多岐木罪と謝りむ多岐木の控括と  
 多岐木疾と云平後あつて多岐木を多岐木神點頭して諾しぬ貴志  
 降んと云二日のあつたわづ願ふ平後の後修造の事多岐木たまふ  
 多岐木と云云連然え諾し貴志の多岐木子後多岐木と云氏を多岐木  
 計のあつたと云後多岐木と云と云と云病と云と云金と云氣力

平日のごとく云連家の子即後と集る云云生乎神明と云多岐  
 鬼神と云けり多岐木の多岐木多岐木の病荒田の神の祟り  
 多岐木の罪と謝せんば祠廟を再建と云と云原氏多岐木教  
 多岐木の黙止と云多岐木の似多岐木も荒田の神多岐木の恨あつて  
 多岐木の多岐木多岐木に充人たりて自ら修造の事多岐木の地  
 多岐木の荒田の神あり云古記と云案多岐木の往多岐木地多岐木人蛇と云  
 多岐木の圓行未あるを多岐木の教と云後猶多岐木の多岐木  
 其獨體と云ありて祠と建りしと云土人祈願と祈りて其驗  
 わりしと云衛宮宇莊兼と云四時の祭祀た多岐木の多岐木  
 を國の宗廟社稷の神にもわつた詮ずりとも云淫祠と云と云出宗  
 ぶだも理ありて云多岐木の無乱と云小の神社佛圖無史に云



荒廢あらかたしむるを勳いさなとあはれんまづは民饑たみうく困用くわんようたるをば  
再興さいきやうを議ぎするに暇ひまなは民の愚おろそあるより淫祠えんじを奉まつりて神祇しんぎ  
を傍かたわらに依よりて淫えんの澤たくはし功徳こうとくを著あせりて無益むえきの丈だけ初はつと建たて  
肉池にくちと同おなく民力たみりきを費つひやはるに廢ふしたるを人々ひとびと修しゆ造ぞう  
せりて益えきありて亦また害がいを成なすを情なさけなく禍わざはひを成なすを由よしと  
神かみの民人たみびとを保護ごほするものありて民の饑うたるを憐あはれりて已まりて  
と建たてしむるを懐なつつとれ怒いかれを合あむ山皇やまみ神かみのにおんや唐土たうどありて  
地ちをさやて祥さむらいよ建たてし淫祠えんじを壞こわす事こと違ちがひありて例たとのつかりて  
の故地こちすも申まをす公民こうたみの福ふくあり除のぞくべしわさくはえ僕從べつじゆ教きやう百人  
と聞きく彼地あちより淫祠えんじを壞こわす海うみに沈しづみ片瓦せんがものもなほ  
ありて也なりと煙拂えんぷきへ掃除そうじゆせし後のち富田ふたより氏うぢを以もつて請こん

氏うぢを以もつて平ひら後ごを誓ちかし且かつ他道たかみちのまを促うす云連うんれん祠じを壞こわす  
と聞きく諸しよに氏うぢ豊ゆ駐ちく西去さいこのどく云連うんれんの利り害がいを  
く懐なつつやとわめ氏うぢをすまはく初はつより云連うんれんとす  
まあまが今いま更さら言ことふあはくやとわ世後よごのまをさへひりまは  
一月いちげつ解とけて城外じやうがいに概おほく日暮ひくれ見みかへりて馬うま狩かりくすまはわ  
松まつを子こ白しろを子こん髪かみを子こん力ちからと搦なす馬うまを子こんあはら  
よりとわ荒男あらかたの神かみあり眼めを腫はれし罵ののして云汝うん信しんありて  
と毀滅こいめつするを恨うらみ必かなら報うるなりとる勢いきほきさるに氏うぢ  
を法はふて始はじめとかりてと謝あやまると神顔かみかほをさげぞん云連うんれん  
威福いふく盛さかんにて若妻わかめの頼たのみありて家敵いえたてとまわらば汝うん  
命いのち衰おとろへ恨うらみ報うる時ときありて云畢ひりて忽たちちの行所ゆきところとまは



僕後ごにおもろ其形かたちをまもと氏をうりまり病やまをかへり前まへにいて  
遂つにい死しにまじり其子孫こひご皆みな大徳おほとくのし門かどにいりてあるまにま連つれまりしと  
ともくも後のち入い道みちにいりて守まもりて敬うやまへりしといふまにま餘あまりに死しにまじり族うぢ盛さかんじ  
ても武ぶ名なをいひまりしといふまにま誠まことにま豪傑ごうけつのし段たんといふまにま

席上奇觀垣根草一之巻終

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

三



